保育所

1歳児～2歳児

葛城市立磐城第２保育所

はばたくなら ⑤

先生、わたしのことすき？
～Ａ児との関わりから気付いたこと～

取組について

■近年、若い世代の核家族世帯が増え、仕事や育児に追われ、子どもと向き合い関わる時間が持てず、保護者のペースで生活している家族が多く見受けられる。こういった現状を踏まえ、本保育所では一人一人の育ちや特性を理解して関わり、発達の連続性を意識しながら、「環境」を通して、それぞれの時期にふさわしい生活や遊びの経験を重ねていけるよう日々保育に取り組んでいる。

■乳児期に”安心”して過ごすことが、子どもの健やかな心身の発達に最も大切なことであると考える。人的、物的、援助の在り方等、子どもと関わる全てが育ちに欠かせない「環境」であり、一人一人の姿をまっすぐ捉え、愛情に満ちた応答的な関わりをするために、声のかけ方や安心できる環境作りができているか、繰り返し担任間で話し合い、試行錯誤しながら保育を進めてきた。その中で、環境のあり方や保育士自身の意識について見直した。

取組を通して

日々保育をする中で慣れてきてしまっていることや「この子はこういうタイプだから」と決めつけてしまっていることがあることに気付き、子どもにとって本来安心できる存在である保育士に自分がなれていないことを反省した。「安心」できるとはどういうことなのか。今までの凝り固まった考えで子どもを見るのではなく、母親のような目線で接したいと思い直し、クラスの担任とも考えを伝え合いながら子どもと関わった。安心できていない時と安心できている時の子どもの姿とはこんなにも違うんだと実感した。安心できることで子どもが持っている力をどんどん発揮していく姿から、いかに、「安心」できることが子どもの成長発達に大切であるかが分かった。

１.はじめに

私は今年度2歳児１８人の担任をしている。昨年度は、１歳児の担任をしていて持ち上がりとなった。１歳児の入所当初は、ほとんどが新入児で、初めて保護者から離れる不安や慣れない場所での生活に泣いている子どもも多く、子どもたちとの関係を作ろうと一生懸命関わっていた。保育士の懸命な関わりと子どもたちの成長もあり、GW過ぎには、ほとんどの子どもたちが泣くこともなくなり、落ち着いて過ごすようになった。そんな中、A児は様子が変わらず激しく泣いていた。

（１） １歳児 A児の様子

４月に入所。１日中激しく泣き、午睡時、入眠はするが１０分で起きて、また泣くということを繰り返していた。保育士が抱っこをするが、体の緊張感も高く大きな声を出して泣き止まない。呼んでも来ることはなく、表情も暗く、反応を示さなかった。

（２）保護者との連携の中で

送迎時に保護者に毎日様子を伝え、家に帰ってからの様子も聞いていた。母が言うには家では色々な単語が出ていることや歌が好きで歌を歌っていることを聞いた。保護者も保育士も家と保育所の様子が全く違うことを把握し、どのようにすれば良いのかなぁと頭を悩ませるような状況になっていた。

今までの保育士経験から、A児がそのような姿を保育所で見せるのは、母親との愛着関係がうまくできていないことからくる不安が強いのではないか。または、新しい場所への不安感や過敏さがあり発達に問題があるのではないか。という決めつけた見方をして、保護者にアドバイスをしたり問題提起をしたりし、解決しようとしていた。

（３）気付き

毎日保護者と子どもの様子を話している時にふと見た本児の表情にドキッとした。保育所にいる時とは全く違う安心しきっている表情だった。私は保育所でAちゃんにこんな表情をさせてあげられているだろうか…。

自分たちができることは全てやっていると自負していたが、一番大事である本児の思いに気付けなかったこと、保育士目線でしか保育ができていなかったことに気付き、ハッとさせられた。

（4）見直し

子どもにとって安心できる場所となるよう１対１の関わりをより意識し、工夫することを試みようと考えた。そのように気持ちを変えると、今まで「保育所いや！」「先生いや！」と見えていた本児の保育士を見ている表情も「私どうしたらいいの」「先生は私のこと好きって思ってくれてるのかな」というように見えるようになった。反発として間違えた捉え方をしていたのは保育士側で、子どもの方が寄り添おうとしてくれているように思うようになった。

特に意識したこと

・オムツを替える時に「きれいになったね」「気持ちいいね」と子どもの気持ちを言葉にして子どもと心を通い合わせられるようゆっくりと1対1での関わりを大切にする。
・抱きしめたり抱っこをしたりする時にただただ抱っこをしていたらいいのではなく、我が子を抱くようにしっかりと気持ちを込めてスキンシップをする。

①【環境の工夫】安心できる空間作り

子どもが見えやすいように視界がよく見渡せる空間・・・走り回りたくなりやすい
ゴロゴロできる場所がない

⬇

天蓋を付けて天井を低くすることで子どもが落ち着く場所ができる

ぬいぐるみと一緒に
ゴロゴロ♪

②【遊びの工夫】生活につながるおもちゃ

洗濯ばさみで色んなものを挟んで指先の練習

ズボンにいっぱい
つけたよ♪

指先にグッと力を
入れて…

うまくつけられたよ

シュシュを足や腕にはめて、靴下を履く動作を遊びの中で学ぶ

こっちの足にもつけよう♪

足を上げて、
うまく入るかな？

友達につけてあげよう♪

（５）変化

関わりを意識してすぐ、１対１でのオムツを替える場面で、「きれいになったよ。気持ちいいね。」と声をかけると、初めて子どもの方からギューっとしてくれた。突然でびっくりしたが、同時に嬉しさと気持ちが通じ合った感覚がこみ上げ、愛しく思いＡ児をギューっと抱きしめ返した。

↓

それから、表情も朗らかになり、一気に泣くことがなくなり、遊びにも積極的になり、給食もよく食べ、午睡も自ら入眠し一定時間睡眠を取るようになった。

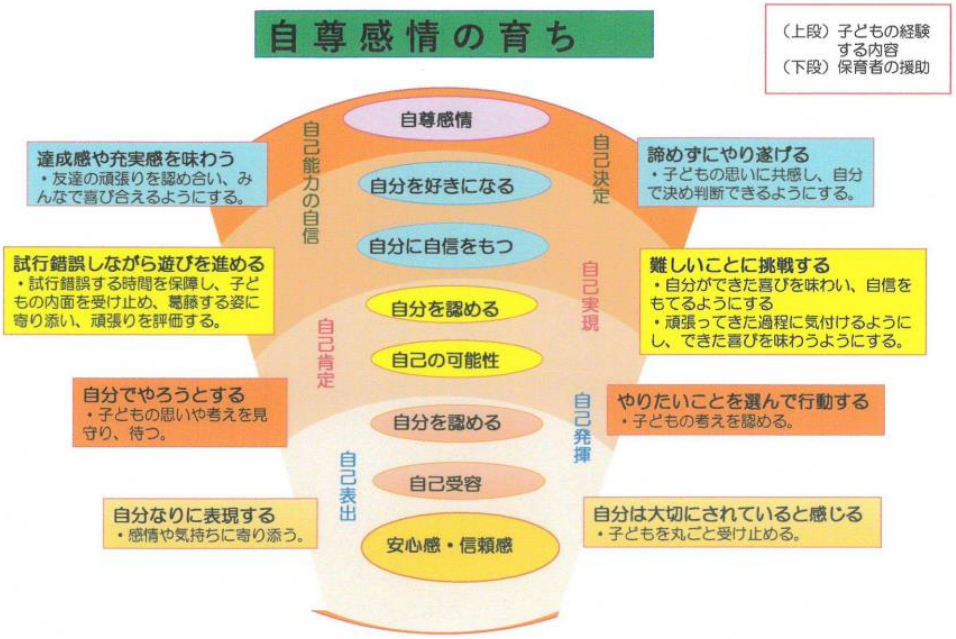
↓

安心できる場所や人ができたことで本来の子どもの姿を出すことができた。
保護者といる時と同じ笑顔が見られるようになった。

２.その後、２歳児になったＡ児の様子

（１）進級して、保育室や複数担任の保育士が変わったが、新しい環境でも１歳児入所時のように泣くことはなく、保育士に抱っこを求め、笑顔で保護者と離れ、安定して過ごしている。Ａ児の笑顔から安心していることを感じられると共に、保育士自身もＡ児との心の絆ができているという安心感があることから、お互いに感じている安心感が信頼関係であると気付いた。

そのような信頼関係ができ、２歳児になったＡ児は衣服の着脱やトイレ、食事などを進んで自分から行っている。また、言葉でも一生懸命思いを伝えながら、保育士や友達との関わりも積極的で楽しく保育所生活を過ごしている。



引用『はばたくなら　令和２年度　実践事例集　』

（２）このようなＡ児の意欲的な姿から、左図にある『安心感・信頼感』が得られたことで次の自己表出そして自己発揮へと自尊感情の育ちの基盤ができつつあると考えられ、自尊感情の育ちの土台である『安心感・信頼感』が子どもにとっていかに大切であるかが良く分かった。

３.終わりに

　保育士経験を重ねていく中での成功体験が、時には自分の考えを狭くしてしまうこともあるのだと、今回のAちゃんとの関わりの中で気付くことができた。保護者に我が子と向き合って欲しいと思うこともあるが、その思いが先行した考え方になっていないか、自分自身はどうなのかということを、今後も色々な子どもや保護者と出会っていく中で改めて思えるようにしたい。毎回今回のように思い直したり考えを正したりしていけるのか不安に思うが”安心できているかな？”と、子どもの姿を見ていつも疑問を持つようにし、違う視点からも子どもを見ていけるような柔軟な保育士でいたいと思う。